

洋書輸入協会会報

VOL. 17

NO. 7

(通巻195号) 昭和58年 7 月

理事会報告

5月26日

(一) 定時総会報告

5月11日(水)に開催した定時総会の報告文案を承認した。

(二) 文化厚生委員会報告

6月10日(金)～11日(土)に開催する東西合同懇親旅行会および5月21日(土)に開催した釣大会について報告

がなされた。

(三) 賛助会員から正会員へ

従来賛助会員であったイースタン・ブック・サーヴィス株式会社および株式会社リージェンツ出版社が正会員となることが承認された。

(四) 10月に開催される Tokyo English Language Book Fair を洋書輸入協会が後援することを決めた。

(五) その他。

文化厚生委員会だより

第19回東西合同懇親旅行 長良川・日本ライン下り

梅雨の季節でもあり、まさに天候の具合が旅の成否を握った。初日の夜は「鵜飼い」、翌日は「日本ライン下り」という、屋外の遊びをメインとした思い切ったプランであったからである。文化厚生委員会世話人諸氏の、至誠(?)が天に通じたか、6月10日・11日の両日ともまぎれもない晴天に恵まれた。まことに、楽勝(!!)というべきか。

東京勢は10日12時24分発のヒカリ号に乗り込んだ。世話人の一人、弊社の武田が近親不幸のためそのまま大阪へ、というようなハプニングもあったが、車中、缶ビールなども配られ、(東亜ブック鶴さん持参の樽生も加わり)一同ゴキゲンで名古屋着、在来線(東海道)に乗り換

えて岐阜駅へ。駅前に待ち構えていたバスで、宿泊先の岐阜グランドホテルに落ち着いた。長良川に面したご当地最大のモダンなホテルである。

5時半、夕方とはいえ、まだ明るいうちに、浴衣がけでサングラバきといういでたちは、洋風ホテルのロビーでは、どうもサマにならぬが、とにかく参集。リゾート地のことだ、気にするまい。ロビーを出てホテルの前の石段で参加者71名(うち女性は9人)全員の記念撮影。例により、メクレンブルグの鈴木さんをお願いする。今回の旅行では、これが全員一同に会する唯一の、貴重な瞬間でもあった。

理事会報告……………	1	へたでもいいとも……………	3	Book Review No.93 ……	6
文化厚生委員会だより		書籍展示会のお知らせ……………	3	お知らせ……………	7
第19回東西合同懇親旅行		外国出版社紹介 No.95……………	3	来日外人名簿……………	7
長良川・日本ライン下り……………	1	学術情報システム……………	4	総代理店ご案内……………	7
第13回東西対抗ゴルフコンペ…	2	ダイレクトリー委員会からの お知らせ……………	6	広 告……………	8

抽選で3グループに分れて乗船。船には和風弁当と酒・ビール・ウイスキーが用意され、ホステスさんもそれぞれ数人が乗船。(柳ヶ瀬から派遣されているのだが、当会予算のせいか、あまり美人とはいえない。後でサイテックの高瀬さんがいかっておったな。)ホテルから別送の鮎の塩焼きも届き、酔う程に飲む程に、3艘の船をアクロバット宜しく渡り歩いて、サービスにつとめる会員もチラホラ現れ、花火のお遊びなどもあって、日も暮れる。いよいよ鶴匠の出現である。鶴さばきもあざやかな、かがり火に映える鶴匠の顔は荘厳ですらある。ただ、シーズンとはいえずや早すぎたのか、鶴のかなしき努力にも拘らず、成果はかんばしかなかった。それはともかく、鶴飼いというのはまことに優雅な古典絵巻であるというのが実感であった。

ただ今回、残念に思ったことがある。岐阜グランドホテル江崎料理長ご自慢の、洋風懷石料理にありつけなかったことであり、更にいえば、丸善福田さんのカラオケによる絶妙な替唄を聞けなかったことであろうか。

翌朝、バイキングの朝食を済ませ、バスで美濃太田へ。乗った船は人数の関係で、残念乍ら艀は使われず、モーターであった。モーターの音さえ無ければ、とアカデミックの月橋さんが盛んに悔んでおられた。しかし、スリルはそれ程で無いにしても、太陽をいっばいに浴びて、水しぶきもちょっぴり浴びてのライン下りはまことに楽しい。兩岸のたたずまいもなかなかで、動物に似た奇岩も随所にあり、見所はローレライだけという本場ヨーロッパのライン下りよりもはるかに宜しい。(こちら船遊びの頃、恐らくゴルフ組もたっぷり楽しんでおられたであろう。)

犬山に着いて、ビールと中食。待っていたバスに再び乗り名古屋駅に向う。途中、多数意見により名古屋城を見学。プラプラ城内を見ていると、陳列された武具・調度類も結構目を楽しませてくれるし、重文の襖絵は殊に心をなごませてくれた。

名古屋駅で関西の方々と別れを告げ、3時43分のヒカリ号で一路東京へ。終始付添ってくれたサンヨー・トラベルの宮山さん、ご苦労様。

最後に一言。先述の如く全員が一同に会する時間が殆んど無かったので、東西合同懇親はやや偏った形になった筈であり、文化厚生委員会としても、今後の課題の一つである。

(三洋出版貿易・伊部記)

第13回東西対抗ゴルフコンペ

長良川の鵜飼いの情緒を楽しんだ東西合同懇親旅行会は、一夜明けて岐阜北 C.C.で待望の東西対抗ゴルフコンペを行いました。東軍15名、西軍11名、初参加は吉本(紀伊國屋)金原(医学書院)の両氏に、園山みさぎ(ゴールデン・ブック)北村雅子(ハーバー)の御婦人方が華やかな彩りを添えて開幕。トリッキーな山岳コースに手を焼いて、O.B.続出で苦戦の連続でしたが、日頃このてのコースに馴染みが深い故か、関西勢の活躍が目立ち、団体戦は西軍優勝、個人戦も雌伏10年の杉原氏の初優勝、上位陣にずらり関西勢と云う結果でした。また来年をたのしみに。

個人戦		Net.	(HDCP)
優勝	杉原 進(ユニオン)	76	(25)
2位	柿谷幸造(ノベルティ)	77	(22)
3位	相良廣明(紀伊國屋)	79	(20)
4位	三宅璋弘(三晃図書)	79	(31)
5位	由利 洋(トッパン)	79	(32)
●ドラコン賞 金原(医学書院) 松永(北尾書籍)			
●ニアピン賞 三宅(三晃図書) 松永()			
●ベスグロ賞 松永(北尾書籍)			

団体戦 ○西軍12点ー東軍10点 (勝2点 負0点)

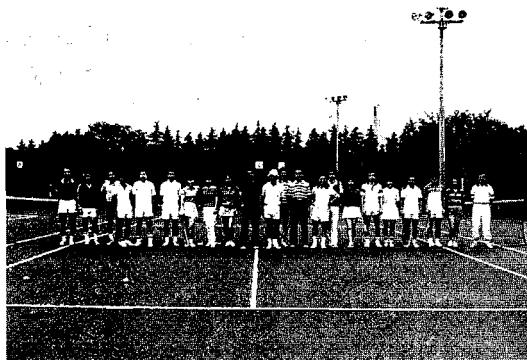
(西) 松永(北尾) 2ー3 桜井(エイビス)○(東)
 " 中村(ブックマン) 3ー4 金子(オリオン)○ "
 " ○杉原(ユニオン) 1upー鶴(東亜B) "
 " ○河崎(三洋出版) 1upー市川(ハーコート) "
 " 三宅(三晃図書) 1upー相良(紀伊國屋)○ "
 " ○前田(ブックマン) 1upー村山(ゲータ) "
 " 鈴木(旭屋) 2ー4 由利(トッパン)○ "
 " ○大年(栄出版) 2upー入谷(丸善) "
 " ○柿谷(ノベルティ) 1upー山川(USACO) "
 " ○谷口(厚生社) 1upー上杉(UPS) "
 " 畑() 2ー3 鎌田(ナウカ)○ "

(関西支部・松永記)

へたでもいいとも！

精神年齢が若いという点だけが共通する、テニス気遣いの集まり、400会（フォーティー・ラヴ会）恒例の春期合宿が5月28日・29日に行われました。出版健保のテニス大会と日程が重なったりなどで心配されましたが、初参加の方3名を含めて24名が伊豆大仁テニスクラブに集合しました。

日ごろの仕事が暇すぎるせいか、皆さん驚くべきパワーとスタミナで、早朝練習までやっても疲れを知らないばかり。合宿ごとに確実に腕を上げて先輩方にほめられる人も何人かいたようです。二日目の午前中にダブルストーナメントを楽しみました。山口さん（友隣社）と鈴木さん（ミロブック）のペアが安定した試合ぶりで



勝ち進み、決勝戦で中井さん（アカデミア）河内さん（マクミラン）のペアを敗って優勝カップを手に入れました。

テニスコートでラケットを握っている時よりも、夜の宴会でマイクを握っている時の方が生き生きとしている人が若干名いたようですが、皆さん最後まで元気に走り回って2日間の予定を消化、帰路のテニス談義はもうプロプレーヤー並みでした。（H.M.）

書籍展示会のおしらせ

第一回ジンバブエ国際ブックフェア

1st Zimbabwe International Book Fair and Exhibition, Zimbabwe, Aug. 23—27, 1983

第二回エキスポ・ラング

Expolangues: 2nd International Language and Culture Week, Paris, Jan. 25—30, 1984

第一回マドリード国際ブックフェア

1^{er} Salón Internacional del Libro, Madrid, Oct. 4—9, 1983

第六回世界ブックフェア

The Sixth World Book Fair, New Delhi, Feb. 4—14, 1984

外国出版社紹介 No.95

Dinosaur Publications Ltd.

Beechcroft House, Over, Cambridge CB4 5NE, Great Britain

Cambridge 郊外の美しい村にある出版社で、最初の本は、1967年の出版という事であるからまだ歴史はそんなに古くはない。現在 Managing Editor である Althea Braithwaite 女史が始めた子供向の本専門の出版社である。日本ではまだ多くの人に知られる所までなっていないが、英国や米国では同社の一貫した本作りのポリシーが、相当の評価を得る所となっている。そのポリシーは、あくまで高度なレベルの子供向図書を作る事で、子供の親、教師、批評家などの評価をも

充分得られるものを出して行く事であるという。絵本というジャンルの性格上、印刷には特に配慮をしている。Managing Director の Christopher Wingate 氏は、大きな印刷会社に25年も居た印刷の専門家である。

最初の出版は幼児向が専門であったが、今では様々な話材で、3歳から16歳ぐらいまでの対象の本を出版する所まで拡大して来た。それらはみな子供のイメージに強くうったえる本として書評氏の称賛を得る所となっている。（SSD. SN）

これからの学術情報流通の在り方 III

(講演 昭和58年3月22日(火) 於：学士会館)

日本学術振興会総務部長 田 保 橋 彬
(前 文部省 学術国際局情報図書館課長)

それから4番目はデータベースの問題ですが、この学術情報システムの利用者は大学の研究者ですから、情報の受益者であると同時に生産者であります。これが一般の情報提供システムと性格が違っていて、日本科学技術情報センター(JICST)等は導入したデータベース、もしくは文献等によってデータベースを作ってサービスをするというもので、エンドユーザーが研究成果を生産するということはありません。従ってシステムの中でデータベースが出来上がる、特に数値の場合には当然そこに評価がありませんとデータベースとしての価値がありませんので、関連する研究者による評価を得た形でのデータベースを作っていく、という事がシステム内で行なわれる。それがまたシステム全体の利用者に利益をもたらすという形で一つのサイクルになっている訳です。

五番目としては先程申し上げた様に JICST 等については主として二次情報を提供するだけですが、学術情報システムについては二次情報で原論文、もしくは原図書を検索し、且つ所在のデータベースとリンクしておりますので、当然ぐるっと回って初めの環の所まで戻りコピーを提供して、サービスが完結する形のものになる予定です。従来のシステムと本質的に違い、世界的にもユニークなものになると思います。皆様ご存じの Ohio 州にあります OCLC は、2,200 近くの図書館が関連しており、これは所在目録でオリジナルインプットもできますが、二次情報の検索とはリンクをしていませんので、世界に類例のないシステムを私共は作ろうとしていますし、先生方のご協力を頂いている訳です。

学術情報センターの機能

中枢となる学術情報センターの機能について申し上げますと、第一番目には、当然国公立大学の研究者のニーズに応じなければいけないので、システム全体の計画調整の機能を持つ訳です。その将来計画等については、大学研究者のご意向を十分に汲み上げることになりますので、そのサービスは必ずしも黒字になる訳ではなくて、

赤字になる率の多いデータベースもある訳です。二番目として、データベース サービスは、二次情報のデータベースの他、目録・所在情報のデータベース等を運用して行なう情報・検索・提供・原論文入手等のサービス更にはクリアリングハウス等のサービスを行なわなければならないという事です。三番目は、学術情報サービスについての機能として、当然研究開発部門を持たねばなりません。情報処理に関する基本的な研究は大学等で行なわれますが、学術情報処理に則した形での研究開発は、我が国はこの学術情報センターの研究開発部門で行なうべきであると考えています。さらに機能として教育・訓練があります。これについてはシステム内の要員も相当いる訳で、それらの訓練が必要であり、個々のデータベースのマニュアルの作成と更新等が必要です。この4つの機能を持つ学術情報センターを、私共は可能な限り早く共同利用機関として設置をして行きたいと考えております。これが中枢になり、計算機センターを取巻く情報処理関連施設、大学図書館等の拡充整備が緊急に必要です。学術情報システムの構成要素としての国立大学共同利用機関等の研究機関については、特定分野の研究者が集中しているので、特にデータベースの作成という面で大きな力を発揮すると考えております。既に国際的にも高い評価を受けているデータベースも作成されております。大きな構成要素としては、大学図書館があります。図書、雑誌等の全国的な見地からの網羅性のある収集は当然として、それらを相互に利用し合うというシステムを考えなければなりません。国公立大学等においては、漸く相互協力・相互利用のシステムが出来上がり、地域によっては国公立大学を通じた形での図書等の利用が行なわれております。

学術情報システムの中で、目録所在情報システムが動き出すと、それぞれ参加の各大学図書館については、受入れた図書雑誌についてその所在をそれぞれの端末から学術情報センターのファイルにインプットすることにな

り、その役割も担う事になる訳です。又、研究者が図書館へ来て、二次情報の検索、及び目録所在情報の検索を依頼したりするので、窓口的役割も果たさねばなりません。このためには大学図書館業務の合理化を図る必要性があります。更にはブロックにおける相互貸借に資することも必要です。外国雑誌のセンターについては、現在自然科学に重点をおいていますが、将来的には人文・社会科学系の資料センター・外国雑誌センターも必要ではないかと考えております。しかし人文社会学系ではご意見が一致せず難しい点があります。

学術情報システムの効果

学術情報システムで一体どのような効果があるかは、研究者にとって必要とする情報を網羅的に且つ迅速に入手出来るというのが第一の要件で、更には自らのユニークな研究成果を或る評価を経た形で対外的に発表することに一役買えばと考えております。大学図書館にとっては、合理化の問題と同時に自館の所蔵だけではなく、他館の所蔵までに渡って図書・雑誌等の所在情報を研究者等にサービスができる利点を持つ訳です。しかし大学図書館の現状では、一挙にはできないという事もありますので、大学図書館側に要望している事は、現在大学のなかで図書・雑誌等が分散しているのを大きく集約してはどうかということです。それぞれの学部・学科等において単位を小さくすれば、小さくしただけのメリットはあろうかと思いますが、それぞれが図書室を持っていて、隣の部屋は何をしているか分からない状態で図書資料を収集し、その間の連携はあまりない。例えば先生方が週1回お見えになるが、その他の日は部屋に鍵が掛かっていて本が出せないという話になります。従って図書・雑誌の所蔵個所を集約化し、それによって少なくとも学内の共通利用態勢を確立してほしいとお願いしております。更にはこれに伴う合理化の問題・電算化に対する職員の訓練という問題も早急にやって頂くと同時に、既にいくつかの大学で行なっている大型計算機センター等との連携により、全学的な情報流通システムを構築する委員会を作り、促進して頂きたいと申し上げております。以上のように集約化の問題、更には目録等々の業務の電算化による効率化の問題を考えております。

今まで申し上げましたように、今後は大学図書館は学術情報システムの一つの構成要素だと考えられ、全体的なバランスの上で金を投じて行く必要があるのではないかと思っております。先生方から図書購入費を大幅に

増額せよとの要求があり、これにより研究室内に図書等を収め、図書館へ一歩でも二歩でも歩くよりは、座りながら手を伸ばしてとどく書架から全ての本が手に入れれば満足だといわれる訳ですが、そうするとその先生方の満足度を充足するには一体どれ程お金が掛かるか判らない。場合によっては各先生方の研究室が1つ1つの図書館になってしまう訳で、スペース的にも間に合わないという問題が発生します。現実の問題として大学図書館の書庫スペース・所蔵スペースの不足分に対する建築要求が非常に多い訳です。といいますのは昭和30年後半から研究室が整備されました。基準的にいえば、教授1部屋で21m²位の部屋です。それが今図書・雑誌でほぼ満杯になっております。従って蔵書をどこかで面倒を見てくれないか、図書館で面倒見てくれと先生方はいわれますが、図書館は貸倉庫と違いますから、そんな簡単に受け取る訳にはいきません。そうなると話が大きくなり、昨年の国立7大学長会議では、一体保存図書館をどうしてくれるか、それは一体どういう形態であるのかという話になります。これについては、国立7大学の図書館協議会でご検討されている様ですが、現実問題として、ブロックごとにその保存図書館的機能を設けるのか、専門分野別で設けるのかということになります。学術情報システムの中で、保存図書の目録を横につなげて共同利用してゆくことも問題となります。

エレクトロニクス ジャーナルへの対応

話が変わりますが、冊子形態とあわせて磁気媒体でオンライン等により学術雑誌を利用者に提供するアドニス計画は、すぐには実現すまいと思いますが、将来の可能性としては、当初からエレクトロニクスの形での提供も出現すると思います。その場合に一体どのようなサービスをして頂けるのだろうかということが、私共のシステムの中でも問題になってきます。検索、原論文提供等の経費は大学側の負担なのか、端末は何種類持てば良いのかという疑問点もあり、現段階でいいますと、DDX等々に乗らない限り低速の通信回線を利用しなければなりません。また主要な論文をディスプレイに出して、それをハードコピーでとれるようにするには通信回線量が膨大になってきます。将来的には一体どうなるのかという問題も、皆様方のご心配と同時に私共も心配してしまして、紙を使わない図書と言いますか、エレクトロニクスジャーナルなどオンライン端末のみの図書館ができるかも知れません。また著作権問題もでできますし、所謂、

紙の形態ではないものはどうするかということになります。ヨーロッパでは出版社の方々が集って対策を考えられているようですし、アメリカ等においてもそういう形の出版物の是非について協議が行なわれているようですが、これらに対する対応も今後私共がシステムを組む場合に、当然必要になってくると思う訳です。種々話が脱線し、お判りにくいところもあったと存じますが、以上をもちまして、本日の話を終らせて頂きます。

完

引き続き質疑応答が活発に行われましたが、内容の重複等もありましたので割愛させていただきました。ご多用

のところ講師並びに多数の方がたのご出席をいただき有難うございました。

(文教委員会 吉本記)

ダイレクトリー委員会からのお知らせ

“JBIA DIRECTORY 1983”の179ページに下記を追記願います。

NEW YORK ACADEMY OF SCIENCES

Annals of New York Academy of Sciences

(USACO—all books)

Book Review No.93

別冊 The English Journal

英語の辞書カタログ：カタログ・辞書550

’83年刊 18×25.5cm 282p. (索引 p.253—282)

(株) アルク発行

¥1,650

昨年の秋、イギリスでは辞書の新刊、改版が相次いで刊行され、それを“BOOKSELLER 誌”は“Dictionary War”と評していた。その評から、辞書に対する需要が高まってきたのは単なる学習人口の増加によるものだけでなく、現在のハイレベルの多様性ある知的情報が増加し、人は『学ぶこと』を『参照すること』におきかえたことから、“Dictionary War”が成立するという論旨が読みとられた。となると、英語を主体とした“マルチ・文化”の土壌の上で『学ぶこと』を強いられる日本人にとって、辞書は従来の学習参考書としてのツールなぞという役割は極く一部で、辞書が必要とされる局面は多様性をもって展開されてくる、というのが本書に収録された辞書の解説の全てを大雑把に読み終えた時の感想である。編集部ではアメリカの図書館が必備文献としての辞書をチェックする為に使用する Kister 編「Dictionary Buying Order」(1979年刊 Bowker 社)を参考にしたというのが、収録の点数、一点一点の解説付の“辞書カタログ”という点では類書はないと断言している。因みに、本書に収録される550タイトルはまさに“Buying Order”に應えるもの、つまり、現在、日本で入手可能な英語の辞書—550タイトル

である。

解説の内容については、一般の英語辞書の場合は“Historical Principles”、或いは“Current Items”のいづれを重視するものかを明確に示唆し、最近人気のある各種辞典についてはどの局面で辞典を有効に活用したらよいかという前提を明らかにし、その場合、取揃えるには価格、用途の点からのアドバイスをコメントしている。カタログの構成に不可欠である索引は、書名(50音順、ABC 順)、著・編者名、出版社別となっており、辞書を探す際に便利のように工夫されている点は高く評価して良い。

収録されているエッセイは、「辞書編集者の横顔」、「コンピューターと辞書作り」、「辞書の造本」が辞書愛好家(辞書通とでもいうのか)にとっては興味そそるものと思われる。必読をお勧めしたい。

尚、本書は「辞書275」が1979年、「辞書436」が1980年、そしてその続々々の第3弾となっている。辞書の使い捨ての時代になりつつある今日、5年間の辞書の歴史とは言えバックナンバーの通読も興味のあるところである。

(H.N.)

お知らせ

このたび下記の方がたが、賛助会員から正会員に移行されましたのでお知らせします。

イースタン・ブック・サービス株式会社

〒113 東京都文京区本郷3-37-3

☎(03)818-0861

株式会社 リージェンツ出版社

〒112 東京都文京区後楽2-2-15

☎(03)816-4373

次の通り就任通知がありましたのでお知らせします。

株式会社 厚生社

〒530 大阪市北区堂島3-2-7 ☎(06)451-2155

取締役会長 谷口定一

代表取締役 谷口定三

株式会社 ユー・エス・エシアテック カンパニー

〒105 東京都港区新橋1-13-12 ☎(03)502-6471

取締役会長 山川隆雄

取締役社長 山川隆司

次の通り代表者の変更がありましたのでお知らせします。

株式会社 梅田書房

〒530 大阪市北区角田町8-7

阪急百貨店5階 ☎(06)361-1381(Ex.)2556

代表取締役 新 野田 達

旧 北脇一雄

次の通り移転通知がありましたのでお知らせします。

ジョン ワイリー アンド サンズ社

新住所：〒141 東京都品川区上大崎2-24-11

目黒西口マンション 2号館401号

☎(03)495-0525(代)

来日外人名簿

6月上旬 Dr. Singh, President,

College-Hill Press, San Diego

” Mr. George McCune, Chairman,

Mrs. Sara Miller McCune, President,

Sage Publications, Inc., Beverly Hills

6月中旬 Mr. Trevor Fewick

Euromonitor Publications Ltd., London

” Mr. Drake

Drake Educational Association, Cardiff

6月下旬 Mr. Nick Hern, Director,

Methuen, London

” Mr. E. Newman

Butterworth & Co. Ltd., Singapore

総代理店ご案内

㈱ 紀伊國屋書店

☎(03)354-0131

International Handbook of Universities 1983-1985

9th edition. Nov. 1983 (Macmillan, UK) ca.¥30,800

北尾書籍貿易 ㈱

☎(06)203-5961

(03)573-3031

Goldberg, A.M. (ed.)- PRODUCT SAFETY EVALUATION (Alternative Methods in Toxicology, Vol. 1)

(Mary Ann Liebert, Inc., USA)¥16,000

丸 善 ㈱

☎(03)272-7211

American Medical Association, USA...All periodicals

Institute of Physics, GBRAll periodicals

(1984 volume より)

American Lung Association, USA

American Review of Respiratory Disease (M)

.....¥30,600

日本書籍貿易 ㈱

☎(06)386-8601

Canadian Certified General Accountants' Research Foundation, Vancouver, Canada ...All publications

The Society of Management Accountants of Canada (SMAC), Hamilton, CanadaAll publications

三洋出版貿易 ㈱

☎(03)669-3761

Oyez Scientific and Technical Services Ltd., UK

.....All publications

●最新刊／6月入荷●細胞の分子生物学



MOLECULAR BIOLOGY OF

THE CELL

Bruce Alberts · Dennis Bray · Julian Lewis · Martin Raff
Keith Roberts · James D. Watson

Molecular Biology of the Cell is an entirely new textbook for students in any of the biological and medical curricula: pre-medicine, zoology, biochemistry, physiology, molecular biology, botany, and anatomy.

Six scientists and teachers spent five years writing, reviewing, and revising the text. The book also incorporates the suggestions and recommendations of more than one hundred other scientists and professors of cell biology.

The focus of the text is the molecular biology of the eucaryotic cell—starting from the basic principles and facts of molecular biology and biochemistry, through the properties and functions of the cell in multicellular organisms. Thus the text represents a unique integration of the ideas and facts of molecular biology with those of cell, developmental, and organismal biology.

The book's coverage is divided into three parts. Part I begins with a general discussion of the evolution of the cell, including cell specialization leading to multicellular organisms (Chapter 1), and then reviews the basic biochemistry of both the small and large molecules found in cells (Chapters 2 and 3). Chapter 4 outlines the principal experimental methods that are presently used to investigate cells. The coverage of these four chapters can serve both as an introduction for students who have not studied biochemistry and as a refresher for those who have.

Part II presents the central core of cell biology and is concerned mainly with the properties that are common to most eucaryotic cells. It begins with the fundamental molecular mechanisms of heredity—the replication and maintenance of DNA and the translation of its linear sequence of nucleotides into the linear sequence of amino acids in proteins (Chapter 5). Subsequent chapters

are devoted to the various membrane systems of the cell and the functions associated with them (6 and 7), the nucleus (8), the mitochondria and chloroplasts that meet the cell's energy requirements (9), the cytoskeleton and cell movement (10), and the mechanisms of cell growth and division (11). Part II ends with a thorough discussion of the mechanisms that enable cells to interact with each other (Chapters 12 and 13).

Part III describes the behavior of cells in multicellular organisms, from the formation of eggs and sperm and the process of fertilization (14), through embryonic development (15), to the maintenance of the differentiated tissues of mature animals (16). The cells of the immune system (17) and of the nervous system (18) are then singled out for detailed discussion, not only because they represent the most striking examples of the complex and sophisticated tasks that assemblies of cells can perform, but also because many general insights into cell behavior can be derived from studies of these systems. The book ends with a unique chapter that presents the special features of plant cells (19).

The text is uniformly consistent both in its general style and in its treatment of the many separate topics. This balance reflects the fact that each chapter has been written jointly by the authors and includes revisions that incorporate suggestions made both by outside experts and by students. All the material is arranged in a logical sequence, but the chapters can also be read independently of one another by anyone with a basic knowledge of biology.

■約1200頁 215×279mm 図版1300点■

■ハード版 11,950円 ペーパー版 8,100円■

■別売 スライド・セット(648枚) 256,520円■

(スライドの分売価格についてはお問い合わせ下さい)

Garland Publishing, Inc.

日本総代理店 ユナイテッド・パブリッシャーズ・サービス社

昭和58年7月 通巻第195号 洋書輸入協会 編集者 柴田 三夫

〒103 東京都中央区日本橋1丁目20番3号 藍沢ビル603号室 ☎ 271-6901

〒530 関西支部 大阪市北区芝田1-10-2 第一山中ビル ☎ 371-5329